

皆様おはようございます。オリンピックもいよいよ今日は閉会式となりました。様々な感動を味わう機会となりましたが、新型コロナウイルスの蔓延もまた気になります。ついに東京都の一日の新規感染者が5000人を超えました。パラリンピックも控えています。選手の方々、また東京に住む方々がまもられますように。また今後お盆を迎え急速に感染が拡大しないよう祈るばかりです。東京のほうのデパート・百貨店の地下の食品売り場で何十人と感染者が起こっているということも驚きです。多くの方の命が守られますようにと祈ってやみません。

日々暑いですがけれども皆様お元気でお過ごしだったでしょうか。熱中症にはくれぐれもお気をつけください。今は台風9号10号と両方近づいております。9号のほうはこちらのほうに来るようです。多くの被害が起こらないように祈ります。皆様方もぜひご用心ください。

さて使徒言行録は4章の最後のところに入りました。持ち物共有するという見出しがついております。信じた人々の群れは心も思いをひとつにし、と書いてあります。心、考え、感性、そして思い。深い深い理解、精神、スピリット、魂、深い深い心根を1つにして、考え方も1つにして、そして同じ家族のように過ごしていた信じる人々の群れについて書かれています。

彼らは1人として持ち物自分のものだと言うものはなく全てを共有していました。それぐらいひとつ屋根の下の家族のように生活していました。誰かに困ったことがあれば持っている者はその持っているものを喜んで分かち合いました。持たない人のために助ける自分が、そこで持っているものを失ったとしても必要なときには他の人が助けてくれる。その信頼の上にあって本当に微笑ましい助けの深い関係がここに与えられていました。神様が彼らの群れをいつも守っていて下さると信じ、みんなで大船の中にいるのだから明日のことを思い煩わなくてもいいんだから今日乗り越えていくこと考えようと互いに考えていました。今日持っているものがあれば今日助けられる、明日どうなるかわからなくても今日何も持たずに苦労している人のために、私のこの持ち物を使ってもらいたい。そのように柔軟で絆の深い、その信仰の交わりがあったということが分かります。

こういう聖書の箇所を読みますとオウム真理教が出家とかそういう言葉を使って、持っている資産をみんな売り払って教団に寄付するよう言ったというような出来事が思い出されます。そしてそれらの方々のご家族は息子が娘が教団に洗脳されてそんなことするのだからやめさせてほしいと裁判したという、非常に残念な事柄を思い出します。けれどもここには命を捨てて私たちのために十字架について私たちの非常に重い私たちがどうやっても返済することのでき

ない罪と死と呪いを贖ってくださったイエス様への感謝と信頼のなのもとに捧げられているためであるということをお願いしたいと思います。

まず最初にイエス様がすべてのものを捧げてくださった模範、お手本があるということをお願いしたいと思います。カルト教団は教祖様が祭り上げられていてそして分配ほんとはしてることかと思えます。この後、「使徒たちの足元に置いて」とありますが、ここで言う使徒たちと言うのは何も彼らが特権階級で自分たちの懐に入れていたと言うのではなくて、教会に捧げられたという意味ですね。そして教会の中で必要としている人にそれが分配されていくと言う出来事だったわけです。教会で祈りの中で分配は決められました。神の前に等しく平等である人たちの群れの教会の助け合いが記してありまして、カルト教団のような教祖様が非常に偉い立場にあってそしてそこに権力も富も集中していると言うあり方ではなくて、キリスト教では教会では神の子イエス様が、絶対的に君臨すべき方が、私たち同じ人となり、そして弟子たちの間で最も小さい、低いものとなって奴隷の役割である足の裏を洗うようなこともなされ、ついに十字架にかけられ、死に、復活された、その方に対する感謝をお捧げする、その模範の中において、私たちも捧げるという訓練をさせて頂く、そのようにして、互いに信じた者同士が、このイエス様を信じる者の群れの中でそのイエス様にならって捧げそして隣人を思い、助け合ってやっていくんだと言うそういう価値観が記してあるわけです。

そういうイエス様に対する信仰を持って、心も思いは1つにしていくこと、そういう感性も感じ方もイエス様への感謝もそして将来への委ねる思いも、神様が養ってくださって、全て共有していたということになります。

「ひとりとして持ち物を自分のものだと言うものはなく全てを共有していた」とありますが、そのようにして、この信じる人たちの中で配慮がありました。気配りがありました。困っている人は、自分が困っているということを伝えることができました。そしてそれに対して何の咎めも嫌味もなく、持っている人から分け与えられる出来事がありました。今日私は持っているから、今日使い切れないものも持っていて、今日を生きられない人がいるのなら、持っても仕方がない。今日辛い人もいるんだから、今日捧げます。それでは明日はどうするのか?明日のことは明日自らが思い煩います。明日私が無くなってしまう。例えば明日持っている人が私を助ける、それでいいんだ。これが信仰に基づいた助け合いの心でした。素晴らしい慰め深いシステムがここにはありました。理想の社会制度でした。いま世界には共産主義、社会主義、資本主義などがありますけれども、ここにはキリスト教的な共産主義といいますか、社会主義と言うふうに言われるこの制度がありました。この中にはイエス様を中心とした制度があり、そこには働きもしないでいつも持ってないから助けてくれと言えば

それで働かなくていいと言った事はなく、自らを贖いのために身代わりにしたイエスキリストを中心とした助け合う慰め合う安らぎの場があったということが分かります。イエス様が進んで貧しい者となりそして傷を負って私たちのうち傷をいやし、死と呪いを身代わりとなって引き受けて私たちの重荷を負ってくださったように、その仕える心で互いに仕え合うところに大きな喜びがあります。

神様が彼らとともにいつもおられました。ですから神様を愛する、信仰にある人たちはいつも神様のみこころを行うことが出来ました。その中であって困っている人がいればすぐに助けるのです。「目に見える兄弟を愛することができないでどうして神を愛することができましようか」と聖書にあります通りです。

1ヨハネ 4:7 愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。

4:8 愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。

4:9 神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。

4:10 わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。

4:11 愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。

4:12 いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべて全うされているのです。

4:13 神はわたしたちに、御自分の霊を分け与えてくださいました。このことから、わたしたちが神の内にとどまり、神もわたしたちの内にとどまってくださることが分かります。

4:14 わたしたちはまた、御父が御子を世の救い主として遣わされたことを見、またそのことを証ししています。

4:15 イエスが神の子であることを公に言い表す人はだれでも、神がその人の内にとどまってくださり、その人も神の内にとどまります。

4:16 わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。

4:17 こうして、愛がわたしたちの内に全うされているので、裁きの日に確信を持つことができます。この世でわたしたちも、イエスのようであるからです。

4:18 愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。

4:19 わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。

4:20 「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。

4:21 神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です。

その神の家族の中で、神を愛する者の群れの中で助け合いがあって、幸せと安らぎがないならば、どうやってその群の素晴らしさを他の方々にお知らせすることができるのでしょうか。どうやって神様の教えのすばらしさを証しすることができるのでしょうか。そのように、心を1つにし思いを1つにして、一人一人が大切にされて、持ち物を互いに共有し、助け合うそのコミュニティーから力を得ている人たちは、大いなる力を持ってイエス様の慰めと愛と救いの力をいただいて、奇跡的に、力強く、力を持って、強さを持って、能力を持ってから主イエス様の復活を証しました。その苦しみとその主の復活、身代わりの死と復活を、聖霊によって大いなる力を持って証しました。

そうしたところみんな人々から非常に好意を持たれました。大きな恵みが彼ら一同に注がれ、そして彼らの証しは成り立って行きました。

4:34 信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、

4:35 使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。

4:36 たとえば、レビ族の人で、使徒たちからバルナバ——「慰めの子」という意味——と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフも、

4:37 持っていた畑を売り、その代金を持って来て使徒たちの足もとに置いた。

1人の人の例えが出てきます。愛の実践者バルナバです。彼は慰めの子と呼ばれました。助けの子、慰めの子、やすらぎの子。彼は本当に良い模範として示されるほど深く心を尽くした人でした。兄弟姉妹を、家族を愛して気配りをした人でした。キプロス島生まれのヨセフも、

4:37 持っていた畑を売り、その代金を持って来て使徒たちの足もとに置いた。

そればかりでなくこのバルナバの生涯は本当に行き届いた慰めに満ちた配慮に満ちた人生でした。使徒言行録9章にありますけれどもパウロは回心しました。けれどもつい先日までクリスチャンを迫害していたと言うことで改心して、クリスチャンの仲間に加わろうとしたときに、皆は彼を信じませんでした。しかしバルナバはサウルを連れて、人たちの所へ案内し、サウロがどのようにして主に出会い、主に語りかけられ、そこでイエス様の名によって大胆に宣教をしているのですよとバルナバは執り成しました。

使徒 9:26 サウロはエルサレムに着き、弟子の仲間に加わろうとしたが、皆は彼を弟子だとは信じないで恐れた。

9:27 しかしバルナバは、サウロを連れて使徒たちのところへ案内し、サウロが旅の途中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって大胆に宣教した次第を説明した。

9:28 それで、サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の名によって恐れずに教えるようになった。

そして11章を開ましても書いてあります。バルナバは立派な人物で聖霊と信仰とに満ちていたとあります。

11:19 ステファノの事件をきっかけにして起こった迫害のために散らされた人々は、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで行ったが、ユダヤ人以外のだれにも御言葉を語らなかった。

11:20 しかし、彼らの中にキプロス島やキレネから来た者がいて、アンティオキアへ行き、ギリシア語を話す人々にも語りかけ、主イエスについて福音を告げ知らせた。

11:21 主がこの人々を助けられたので、信じて主に立ち帰った者の数は多かった。

11:22 このうわさがエルサレムにある教会にも聞こえてきたので、教会はバルナバをアンティオキアへ行くように派遣した。

11:23 バルナバはそこに到着すると、神の恵みが与えられた有様を見て喜び、そして、固い決意をもって主から離れることのないようにと、皆に勧めた。

11:24 バルナバは立派な人物で、聖霊と信仰とに満ちていたからである。こうして、多くの人々が主へと導かれた。

11:25 それから、バルナバはサウロを捜しにタルソスへ行き、

11:26 見つけ出してアンティオキアに連れ帰った。二人は、丸一年の間その教会と一緒にいて多くの人を教えた。このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである。

孤立している人がいれば出向いて架け橋となりました。執り成しました。そして皆に迎えられるようになりました。そういう人がいたら本当に素晴らしいですよ。分裂があったとしてもどうやったらまた互いに力を合わせる事ができるのかと人知れず一生懸命執り成してくれる存在は、大変貴重な存在ですよ。そういう中でパウロは恩義を感じ、使徒13章、国外伝道にバルナバを伴いました。そして、マルコが勝手に帰ってしまい、パウロは立腹しましたが、バルナバは彼を受け入れました。

このようにいつも仲間を気にかけて配慮していたバルナバは、その彼の能力をもともとの賜物として持っていたものとは思いますが、常に自分の持ち物を捧げて困っている人を助けると言う捧げる訓練の中でも執り成しの賜物を磨いたのではないのでしょうか。その訓練から、彼は人と人との間にあって困ってる状況、分裂している状況の中で絶えず執り成し橋渡しをすると、大きな働きとつながっていったのではないのでしょうか。

この世界は、貧しい人はどうでもいい、自分とはとにかく勝ち組になるんだって言うそういう考えの中で弱者が置いてきぼりになっているようにも思えますが、そして分裂した社会の中にありますが、心も思いも1つにして1つとして持ち物は自分のものだと言わず共有して助け合っていくんだと言うこの教会の、イエス様に習った生き方というのは今日も変わることなく輝き、慰めとなっているのではないのでしょうか。これが非常に好意をもたれるべき、イエス様を模範として生き方です。私たちはこの慰めの子として世にあって星のように輝くことが出来ます。私たちはそうやってイエス様を証ししていきたいのです。大いなる力をいただいて私たちもまた慰めの子として、イエスの身代わりとしての苦しみと死と復活を証していきたいのです。

そして御心が、天になるごとく地にもなされますようにと、その祈りの実現を祈り続けていきたいと思えます。崩れ悩む方々に希望の光が差しますように。私たちが慰めの子として、今私を遣わしてくださいとお祈りしいたしましょう。